

の皮をかぶり、あらゆる面において耐えに耐えて、捕虜という逆境から脱却できる瞬間である。棧橋より本船信濃丸に乗船の際、大地を二度と踏むまいと大きく蹴って乗り込んだのである。船中に入るや忘れもしない懐かしいみそ汁の匂い。食事はブリの天ぶら、野菜の煮つけ、豆腐のみそ汁、漬け物、三年目にして味わう日本料理。

精いっぱい我々に対する接待だったのだ。胃も腸もびっくりしたことだろう。航海つつがなく舞鶴港着、検査を終え上陸。一週間滞在、その間日本の状況など、すなわち都会の空襲爆撃を受けたこと、広島、長崎両市が原子爆弾を受け、全滅したこと、今、日本が食糧不足で困っていることなどを聞き、戦争の後遺症でその立て直しの懸命であることなどを知らされた。

そして家族に通知もせず、家に着いたのが九月十五日、あまりにも突然のことで子供など父とは思えなかったらしい。すなわち被服はソ連製、顔は土黒く、化け者くらいに見えたであろう。が、よく見ると間違いなく父であり、夫であった。家族たちは泣きぐずれるのであった。あの酷寒の地で、捕虜という最悪の運命に遭ってい

たとき決心した、何がなんでもこの土地の土になりたくない」と精神力で打ち勝つことができ、ここに実現したのである。今は精神的肉体的に疲労の極にあるが、自然に回復に努め、第二の人生に出発したいと誓ったのである。一、三日家にとじこもり休養して、留守中世話になった区内や親類など挨拶回りをして、やっと我に返った気分になった。

無 題

栃木県 富 樫 源次郎

日本国有史以来、いまだかつてなき終戦を悲憤の涙のうちに迎えなければならなかった昭和二十年の八月、満州の寧安近くの山の中でソ連軍の武装解除を受け、その年の秋に貨車で国境を越えてソ連領に送られた。

確かハバロフスク経由でテルマというところで下車、その収容所らしき鉄条網を張りめぐらされた中で二日くらい過ごして、今度はトラックにすし詰めに乗せ

られ、シートをかけられ外界と遮断され、給油のほかはほとんど走り通して幾百キロ走ったのかさだかではないが、夕暮れにトラックよりおろされ、この先は行軍とのことだった。たしか二百人くらいの集団であつたが、ソ連の若い兵隊の監視づきで先へ先へとせき立てられ、長い行軍に耐えられず落伍する者も出てくるが、とにかく健脚家は彼らの言うがまま先へと進んだ。

夜も更けたところで夜を明かすんだと言われ、真っ暗の中自分で手探りで建物らしきものの中にもぐり込んだ。今晚の食事はないと言ひ渡された途端、我々はいよいよ捕虜生活とあきらめた。翌朝起きて外に出て見たら自分らの一晚の宿は、丸太を横積みにした建物の中にもぐり込んで一夜を明かしたことがわかった。ソ連の主婦らしい女二、三人が物珍しげに我々を眺めては何やらしきりと喋っていた。戦友の話によれば、昨夜の行軍中の落伍者は後からトラックが集めて我々と同じ場所で一緒になつたと、この行軍ではソ連にはかられたことがわかつた、体力の強弱が行軍によって分けられたことを。

うわさによれば独ソ戦のために撤収されたバム鉄道の

沿線らしい。翌日からは伐採と山砂利取りのため山の砂利層に深さ十メートル前後の縦穴を掘り、それに細長い白樺の木を一つ割りにして溝を掘り、そこに導火線を入れ二つ割りの元に合わせて底に入れたダイナマイトで発破をかける作業だった。言葉も通じないが手足を使って我々に重労働を強いるのがよくわかる。この溝掘りは溝の長さにノルマがあるらしいが、細かいことはわからない。

ただ追い立てられ、せめて食糧だけでも満足に与えてくれるならまだしも、毎日食糧は黒パン、コーリヤンの原穀、大豆、緑豆、その日その日では何が出るかわからない。ただわかっていることは質量ともに極度に悪い少量の食事をもらつては酷寒時はペチカの上にめいめいの缶詰の空き缶に入れ水を足しては量を増やし、それを捕虜たちがそれぞれ自分の缶を監視している。それでもなくなってしまうこともたびたび、いつときの油断もできない。みんな飢えているのだ。またあるときは一週間に一回の食糧がとぎれたこともあった。初めのうちは作業を休ませてくれたが、あとでは在庫の食材にたんまり水

を入れて見た目の量を多くして作業に刈り出される始末だった。

酷寒と栄養不良と束縛の毎日で倒れ行く幾多の戦友をこの目で見ると、自分の気持ちは平常を欠く、自分でもいかんともなすすべもなかった。しかしこの異国で捕らわれの身では死にたくない、いかなる苦勞をしてもいまだ本国に帰って白米を腹いっぱい食べ疊の上で死にたい。日本人捕虜としてだれもが幾度となく考えたことであろう。

二十年の年も暮れてやがてシベリアにも春が訪れた。このころからは大河は恐らく目測では三百メートルの川幅あり、この河に山から原木を切り出して仮橋を架ける作業だった。直径八十センチくらいの大木に四本の足を八の字に取り付けて、対岸と二組に分かれて橋脚を立てその上にけたを渡してさらにその上に横丸太を敷き詰め欄干もつける作業。八月いっぱいころまで続いた。週に一回くらい割で架橋の神様といわれる老人が来ていろいろ文句を言われながら、二人引きの大鋸と日本の金太郎が持つような斧が唯一の道具であった。道具がないの

でできないと言っても捕虜の言い分は通らない。本当に情なくなった。責任ある作業でもないのに、自然自暴自棄になって、その日その日をいかに何事もなく生きのびることしか考えなくなったのも事実だった。

二冬の酷寒を過ぎ一番つらかった作業は、鉄橋のアーチの足場組みであった。高いところへ登るので、寒さをしのぐ防寒具を来ては体の自由がきかないし、少休止のときはたき火をすればソ連の監視が来ては大声で怒鳴られ、折角のたき火を足でもみ消される。こちらは寒さに耐えかねて幾回消されても監視の隙をみては再びたき火をする。いくら叱られても凍死してはおられない。いくら怒られても死にはしないとふて腐れの気分になった。二年にわたる捕虜生活を体験して今となっては多少学ぶところもあった。いくら栄養不良の中で強制労働を強いられようと、体力のあるうちはよく動けたが、体力が衰えるにつれ精神にもぶり、自身を守る生物の本能で自然と働けなくなった。復員後四十余年、抑留中に亡くなられた多くの戦友の霊を弔うのが我々の務めでもある。